

石段流
針治

十二ヶ條

神かみとて己おのれみ果はるること自由じゆうにぞつものなり神かみ既すでに
身の内うちに生なじむ物ものとて人ひととて耳みみめとのと
肉にくとて骨ほねのめをて鼻はなの物もの成なり鼻はな手てとて口くち
思おもふとてめをてて居ゐ神かみのてはる神かみの
めとて肉にくの生長せいじやうとて人ひととて榮さか精せい神かみ
自みづかちとて人ひととて人ひとの合あ体たいの中うちに
心こころとて人ひととてのよとて人ひとの簡かん如ごとく君きみ臣おみ
父ちちとて母ははのとて人ひとの道みち成なり
知しるがとてあとの精せい神かみのほろ不ふ定ていとて察さして
病やまいの存ぞん亡むつと知しるを逆さか者ものの才さい一のけり活い
て身み外がひ精せい神かみをてけがしたとのめりて白しろ汁じ
少すくくはむりの腦のうとて脊せ骨こつの髓ずいとの中うちに
骨ほねとて一ひと身みに膚かわとて肉にくとて骨ほねとて骨ほねとて骨ほね
宗そう氣きとて宗そう筋きんとて一ひと身みに鍼しんの用ようハ針はり神かみの
虚うつたる心こころにさかぬとて針はりとて針はりとて針はり
精せい神かみをて呼よいふとて針はりとて針はりとて針はり

補法を微針と云ふは宗脈榮衛の滲漏を
融通せしむることをいふ説なり補法のす亦
榮の脈のふれむに海の血の行ふと云ひ
さうに針を痛く呼吸の如く始終動揺して
止まざるは針の呼吸といふはち迎逆義
ある補法と云ふは此迎逆のす術と云
は針を痛く病を益せしむるは
針の害を生ずるなりは迎逆
のほのみ虚法なりは法なりは虚法なり
是は虚なる病に用ひ則十二原虚の實なる
ものなりと云ふを虚法といふのはなりは
實なる病に用ひ微針をせしむるは
の針の呼吸をせしむるは滲漏の如く
久しに針をせしむるは滲漏の如く
○是法を止むるは虚なる病に用ひ
則十二原虚の實なる病に用ひ
是は虚法なり

といふ法なり徐々針を小く病人痛に
知るぬるに痛く知るぬるふゆかい
らばけ成でるるるるるるるる迎へ
の呼吸の術もいさへるるるるるる
久しぬるるる痛むるる自然なる
針を針を進め一寸の術も
正なるるるる針に精神栄衛の
いさぬるるるるの強りもゆるるる
精神栄衛の術も栄も(術)邪氣も
いさぬるるるるるるるるるるる
氣血の術もいさぬるるるるるる
いさぬるるるるるるるるるるる
病もいさぬるるるるるるるるる
いさぬるるるるるるるるるるる
いさぬるるるるるるるるるるる

上中邪小寒法とりてちゅうかの類は名の
病をぬるなりたる所はこまゝに辨

用ゝ不ぜ

酒はる米の末枘の細絡織とささる
糸のささるが通る輸の度比じる
皮膚小迫く熱を流しそむ血絡とさ
是れは四つをささる又油のた便乃
細絡は絡れそむとさる見ても是と
除きささるの細りて血絡は泄しといひ
絡は除くといふ何れも血をささるの
絡なり。鍼針鋒針と破針のれと用ひ
酒はふ酒除といふ補はみ迎に虚実と
つは是内邪黄岐の奥義秘言なり
酒はささる天潢のろとみんと飲み
に似るなりぬハ十一脈を以下明のす
諸はすぬきささるが絡微針の絡のさ

うゝ補^ふ酒^{しゅ}とてちたるも名^な種^{しゅ}を子^しれ
の説^{せつ}のうゝ信用^{しんよう}しる針^{しん}科^かは
家^けめし此^この廢^{はい}とんる代^{だい}あきと
昔^{むかし}て内^{うち}挫^{さう}代^{だい}漢^{かん}と五^ご十^{じゅう}年^{ねん}世^{せい}之^し樞^{しゅ}の
医^い作^{さく}る微^い計^{けい}のほ代^{だい}中^{ちゅう}て説^{せつ}するの
めゝ補^ふはの祖^そづるをうゝし海^{かい}はの
そのみおと有^ある酒^{しゅ}血^{けつ}のうゝずるあ
に用^{もち}養^{やう}中^{ちゅう}一のまうは毒^{どく}業^{ぎふ}代^{だい}神^{しん}を
更^{また}むく破^やるを用^{もち}やる事^{こと}ずる微^い針^{しん}を
うゝ其^{その}業^{ぎふ}通^{つう}る神^{しん}と補^ふるの
をうゝ酒^{しゅ}はを酒^{しゅ}血^{けつ}の上^{うへ}古^こよりうゝ
補^ふはを微^い計^{けい}のほ代^{だい}中^{ちゅう}てその神^{しん}虚^{きょ}
実^{じつ}迎^{むか}ひの手^て神^{しん}なるを代^{だい}中^{ちゅう}て其^{その}代^{だい}中^{ちゅう}て
て河^かのうゝ神^{しん}のうゝ代^{だい}中^{ちゅう}て其^{その}代^{だい}中^{ちゅう}て
深^{ふか}きかみ地^ちなるを

○補^ふ酒^{しゅ}のうゝ針^{しん}灸^{しう}代^{だい}中^{ちゅう}て其^{その}代^{だい}中^{ちゅう}て

亦和せし亦臥し手致の孫とおまほしと
邪く丸瞞しめられはまは孫をふて
御ももゑ臥し是れもゑ遠きお小内様
のこ部九候端の読み依り上中下を
みく九ヶ所の孫と診くくどトを我の
方母名もと邪気の劇きく其たくと
家ありちるゆと迄のえりかるうおにむ
りた必傳り説あるかやうとされ
下致との孫とやる人せうとほりふ
ざくち小回ひちてく一條の續とく
か如き有とふ人子病の孫と病あり
こくとも病く安くと上中下の孫
大いふくくくくくくくくくく
るを子孫と見一きこの端く
内様と診く診くくくくくく
上中下孫のいのは傳奥までさる

[illegible]

[illegible]

如きけたるの缺を骨下のほうへ
骨の太さよりいへん血の右へいへん
肺より変化し赤く是血の源と
なりやあま人食はされば精神榮満た
はきそを血のより四つの系ありて右の
一つは肺の系なり二つは肝の系よりなる
其二つは腎系にありたの二肺より
かへみ振み系よりいへん肝の系より
なり血の系よりいへん血の系より
又いへん肝の系よりいへん血の系より
を呼吸し肺系よりいへん血の系より
を血の系よりいへん血の系より
中二つは血の系よりいへん血の系より
を血の系よりいへん血の系より

膈膜はくまくは肺はいの呼吸こきゅうによせて凹くぼ凸こをう
 ぐるが二液ふたえきありて飲食いんじきを消化じやうかし積滯せきちと
 せし血ちのりずるお機きわく遠とほくを稀し利り
 せも膈下くわの滲しみれもやうく利りせも痛いたも平常へいじやう
 にわたり多おほく病人いびやうじんとざる針科しんか無腫むしゅは
 の利り少利せうりとさう珍めづしき下の汁したのじをぬる
 職しやくく腫しゅ中ちゆうにほほの職しやくく人ひと身の
 重器じゆうきありて玉たまくその寶たからなり脾ひを
 津液しんえきとるく三焦さんしやうとみ屬ぞくく腹はらを
 うとさけと腎じんと肝胆かんたんの二汁ふたじと
 ちめ胃い下腸げちやう上うへめとてたの汁たのじとの
 利りとさし肝かんを病やまいハ中ちゆうに血ちを糸いとと
 若わけと作つくる腰こし中ちゆうに凹くぼ凸この機き小腸せうちやうと
 腸ちやう小腸せうちやうと脾ひ三焦さんしやうと何なんも汁じ若わ

[illegible]

骨數 大小百八十七

附骨ナリ 嫩骨ハ沙數ニ入ラズ 髓骨ニ

頭八上下 髀二項七 背脊十二 腰五 八竅一ツ

腰腹 左三 缺盆 左右二 脾 左右二 肝 左右二 膈 左右二 臂

掌 八右 指 大指三餘ハ四ツ 股 左右二 膝蓋 左右二 髌骨

跗骨 二 足掌 七ツ左右 指 四ツ左右

手家木骨一具ヲ載ス入門之方ニ示サカ為ナリ

第七 竹助膜

肉ニシテ動化トナシモノノウリ 割テ示ス乃

ニ移リテ 宗氣ノ榮衛ノ道ニ代交ス 屈

伸ニ起ス 華下ニ筋ノ筋ノ用ハナリ

一筋必一緩 ヲ一筋必一急 ト云々

膜ニ一層ニシテ 筋ノ筋ノ用ハナリ

腦筋ノ筋ノ用ハナリ

以テ 筋ノ筋ノ用ハナリ

[illegible]

るらそいもその向を挽けしと隙を
 神力と云ふるを某國に十倍と云ふ
 に細くとも人各衣食住のニツメ大井
 ぎるがまゝ仁術の人なりとも衣食住
 地も傍に出でてもよむらむらふが
 負野の針通と針織小きうて某國に
 将書そのがとる人の貴人とも
 衣のひそ衣食の走りやどと熱き
 靴ある人の或る力減るし身と苦
 僕にともうし師はほひをある
 あられハ針刺の妙と云ふめめめ
 の美さうそあひひるるめめ
 正のよめめめめめめめめめめ
 めめ萬病を治しめめめめめめ
 實う職するハ一箇人回さるる

[illegible]

中 五穀五氣の人と養ひ

天地の司ふ生ずるもの五穀と如く人の
人の食物より人を養ふものの皆氣と味
とあり人はいくく生ずるもの皆氣と
胃中を養ふ焦め化して精神を養ひ
味も小腸の滲焦め化して榮衛精神の
根と生ずるもの五穀五氣と榮衛精神の
中五穀の司ふ生ずるもの皆氣と味
消化して大腸の糟粕を必ふその理と
あり

中 二百六十節

行ふより二百六十節と神氣のなり
中入るものは肉と骨にあり
中入るものは人榮衛のおくる不榮衛の
中入るものは人榮衛のおくる不榮衛の

後世にこそ精神を育み形を氣のする
たき山宗氣宗氣氣血氣血氣血氣血
と云ふやうなやうにやうに骨空空満氣
府倫氣穴論本の後にも十四經穴の
説みあるやうな二箇に陽氣十二經
任督の十四經穴をもよほすは多くな
るやうなもののやうな肉の氣の絶滅
三四十節のときれきやうなやうな
肉の氣の元と云ふやうな肉の大會
を各といふやうな會と云ふやうな肉の
氣の谷の會の氣の會と云ふやうな山宗氣
會と云ふやうな邪と云ふやうな山宗氣
と云ふやうな邪と云ふやうな肉の大會
骨節の氣の大會と云ふやうな肉の大會
邪氣の節と云ふやうな邪と云ふやうな
山宗氣の大會と云ふやうな肉の大會

[illegible]

才三 病の源由と案分

因と見親も成るゝ宗氣の方付あは
るを知るが盲人ハ居るをゆかて深
察に及ぶが所のと下を右をよう
にひく業の旺衰を知り病の劇易
を案分する論痛むりのハ業の常り
宗脈自由といふも又押とらん
がけを知るが瘡きき皮膚の下焦る利
に水通と神といふも又宗脈の
外は氣といふもの常りて自由といふ
るものいふ不なり悪さハ邪氣外より
宗脈業の及ぶと塞くや業の
論は或ハ宗氣内は潜る外に
戦慄一色に数やうにわが肺のもの

一は、宗脈のこふなと知るを服薬の
眼小瀆く宗脈の要なり。邪氣腦中
のこふ宗脈の源と繋ぐるをえざる鼻の
息と鼻と鼻の脈の脈は皆が或る
穴と繋ぐるも皆宗脈の腦に瀆く通の
不足なる或る絶するが二外はの味い
が食のむつるに胃腸の消化のあき
大小便のわたり。近皆宗脈のこふ
み十二脈のこふ脈と牽くことある
より起ると知るなりと知るなり

存十二條をその條々の大畧にわけるが
数條にてもさうしう。指深く考へて
さうしてさうしう。さうしう。さうしう。
のこふ。余り。さうしう。人々。さうしう。さうしう。
為道ののさうしう。さうしう。さうしう。さうしう。
勿論。さうしう。さうしう。さうしう。さうしう。さうしう。

きんぐ針刺の術の自由のやまを専
門の学文をうつががきやうにきんぐん
るやう願ふと後が利

嘉永五年四月日

福嶋氏

